高市訪米・日米戦争会談粉砕！３・20 集会 基調報告

改憲・戦争阻止！大行進

アメリカ帝国主義（米帝）・トランプ政権による現下のイラン侵略戦争の現実に怒りを爆発させ、戦争の元凶＝帝国主義を打倒する大闘争をたたきつけよう。そして「法的評価は差し控える」「早期の事態沈静化」などと言いながらイランを一方的に非難し、トランプと一体で戦争を推進し参戦をも狙う日本帝国主義（日帝）・高市政権、帝国主義としての延命のために中国侵略戦争－世界戦争の放火者として登場し、すべてを戦争国家・侵略国家への転換の糧にしようとしている高市を、猛然たる怒りと闘いで打倒しよう。ワシントンで開催されているトランプ・高市の日米首脳会談に対する日本労働者階級の回答として、「アメリカ帝国主義のイラン侵略戦争許すな！日米戦争会談粉砕！中国侵略戦争阻止！トランプ・高市打倒！」を訴え、首都・東京の街頭を揺るがす渾身の大デモを戦闘的に闘い抜こう。

【１】アメリカ帝国主義のイラン侵略戦争許すな！

米帝トランプ政権がイランでやっているのは、100％不正義の帝国主義侵略戦争だ。「核協議継続」を宣伝してそれをカムフラージュにしながら、突如として一斉ミサイル爆撃を強行し、最高指導者・ハメネイ師ら権力中枢を一挙に殺害した。イスラエルと共に数カ月かけて作戦を準備し、２つの空母打撃群、戦略爆撃機、自爆型無人機など、2003 年イラク侵略戦争以来の大規模な戦力を投入し、イラン全土への爆撃を強行した。巡航ミサイル「トマホーク」での女子小学校の爆撃、175 人の児童・教員の虐殺、病院や住宅、燃料貯蔵施設への意図的な爆撃で２週間でイラン・中東人民 2000 人以上が虐殺されている。イランの原油輸出の９割を担うカーグ島への大規模爆撃も強行した。米帝は「イランからの先制攻撃の兆候があった」などというあからさまなデマを振りまいて、自らの先制攻撃を全面的に開き直っている。米軍はスリランカ沖では、インド東部での国際観艦式と合同訓練に参加して帰還中のイラン軍艦船を魚雷攻撃で撃沈した（潜水艦による撃沈はほぼ第２次大戦以来の事態！）。イスラエル軍はレバノンへの地上侵攻も拡大している。しかもトランプは全土に爆弾の雨を降らせながら、イラン国民に恥知らずにも「政権を掌握せよ」などと呼びかけた。そして「あと何度か攻撃するかもしれない。楽しみだ」などと言い放ち、ホワイトハウスはＳＮＳでゲームやスポーツのように爆撃の映像を流し軍事作戦を宣伝している。絶対に許すことはできない。

米帝のイラン侵略戦争は、中東－世界の民族解放闘争に巨大な影響を与えてきた 1979 年イラン革命（大衆的蜂起による米帝かいらいのパーレビ王政打倒、世界革命との結合・発展を志向した階級的勢力の登場、反動的イスラム勢力による革命の簒奪と階級的勢力の圧殺による歪曲）とその体制――スターリン主義とともに帝国主義の支配の決定的破綻点をなしてきた――を転覆するための戦争だ。そして中南米に続き中東から中国スターリン主義をたたき出し、中国とイランの結合（石油・エネルギー・経済・軍事関係）を破壊するための、帝国主義むき出しの不正義極まる戦争だ。歴史的没落を深め、もはや戦後的な「国際協調」的あり方での支配ができなくなった米帝が、自らの「世界の支配国」としての地位をあくまで力ずくで貫徹するために、「米国第一」＝米帝の利益を唯一の基準にして、中国スターリン主義をたたきつぶす戦争＝中国侵略戦争－世界戦争に突っ込んでいる。この中国侵略戦争－世界戦争の一環として、イラン侵略戦争に踏み切った。中東最大の大国・イランへの侵略戦

争は、米帝にとってもこれまでのレベルではない大戦争である。米帝はこれまでも経済制裁や、イスラエル主導の軍事的攻撃などを様々な形でくり返しやってきたが、ついに本格的な直接攻撃、体制転覆を狙う侵略戦争に踏みきったのだ。しかし、イラン人民の不屈の民族解放闘争の意思を圧殺することなどできず、米帝が安定的支配を確立することはありえない。それでも、米帝の支配の貫徹のためには、どこまでも凶暴に、破滅的に、後戻りなく戦争を拡大していく以外にない。イラン人民がどうなろうが、世界がどんな破局・破滅にたたきこまれようが、帝国主義の世界支配が継続できればそれでいいのだ。こんな帝国主義は今すぐ打倒しなければならない。

マスコミでは連日、イランからの反撃を「攻撃の応酬」などとして非難する宣伝が行われているが、断じて許すことはできない。米帝・イスラエルの圧倒的軍事力による暴虐極まる侵略・虐殺に対して、イランがイスラエルと周辺の米軍基地や、米帝のイラン侵略に手を貸す反動的な湾岸諸国の関連施設を攻撃し、ホルムズ海峡を封鎖し、ありとあらゆる手段で帝国主義の侵略に抵抗するのは、まったく正当であり当然だ。帝国主義にこれを非難する資格など１ミリもない。帝国主義を打倒する以外に戦争を終わらせることはできない。私たちに問われているのは、客観的に「平和」を願うことでも、「外交での解決」を求めることでもない（日本共産党らが言っているのは帝国主義者による国益主義の外交だ！）。必死に闘うイラン・中東人民と連帯し、帝国主義を実力で打倒する闘いに猛然と立ち上がることだ。

何よりも、米海軍横須賀基地を母国とするイージス艦「ミリアス」が沖縄県のホワイトビーチに寄港後、イラン沿岸に行き、トマホークでの攻撃を行った（小学校爆撃の可能性もある）。在日米海軍の強襲揚陸艦「トリポリ」（母港：佐世保基地）、在沖米海兵隊部隊（キャンプ・ハンセンの第 31 海兵遠征部隊、イラク・ファルージャの大虐殺を遂行した部隊！）が、３月初めに日米共同訓練（「アイアン・フィスト 26」）で即応態勢を確立した上で、中東に派遣された。日米安保と在日米軍基地が、イラン人民虐殺の出撃拠点になっているのだ。さらに、日米首脳会談を前後して、中東・ホルムズ海峡への自衛隊艦船の派遣も検討されている。文字通り、日本帝国主義は当事国そのものである。日本において帝国主義打倒の反戦闘争を爆発させることが決定的になっている。米帝・トランプとともに日本帝国主義・高市を打倒する大デモを闘い抜こう。

【２】中国侵略戦争－世界戦争阻止、帝国主義打倒の巨万の反戦闘争を

イラン侵略戦争は、米帝の中国侵略戦争－世界戦争の決定的エスカレーションである。イラン人民虐殺が、中国侵略戦争そのものとして激しく展開されている。米帝・日帝－帝国主義の全世界的打倒をかけた歴史的決戦として、中国侵略戦争阻止の反戦闘争の大爆発をかちとろう。

昨年 12 月に公表された米国家安全保障戦略（ＮＳＳ）は、西半球から中国をたたき出して制圧し、中国が「核心的利益の核心」とする台湾について「台湾を奪取するいかなる試みも阻止する」とし、中国の眼前の「第１列島線」（九州・沖縄～台湾～フィリピン）に圧倒的軍事力を構築すると宣言した（米国家防衛戦略＝ＮＤＳ「第１列島線に強力な拒否防衛態勢を構築する」）。中国の存在を容認し取り込もうとしてきた長年の「関与政策」のようなあり方から完全に転換して、軍事力を振りかざし、締め上げ、追い詰め、たたきつぶすことを中国に突きつけた。年頭からのベネズエラ軍事侵攻、グリーンランド領有の表明、キューバへの石油遮断と軍事攻撃の準備、中南米・西半球から中国の影響力を徹底的に排除して制圧

する「ドンロー主義」、米帝・イスラエルによる「停戦」「和平」の名によるガザ大虐殺の上での完全制圧と民族抹殺・植民地化の計画、国連を後景に追いやって米帝の独善的利益を貫徹するための「平和評議会」（トランプを終身議長とし絶対的権限）の設置、そしてイラン侵略戦争、これらすべてが中国侵略戦争－世界戦争の遂行として展開されている。

米帝の中国侵略戦争－世界戦争を規定しているのは戦後世界体制の崩壊である。帝国主義の一角を打倒した 1917 年ロシア革命が突破口を開いた、資本主義から共産主義への世界史的過渡期を、「一国社会主義」の名で歪曲・固定化し、国際階級闘争を裏切り圧殺して、帝国主義の延命を支え共存してきたのがスターリン主義であり、そのスターリン主義の存在を条件に存立してきたのが米帝基軸の戦後世界体制だ。スターリン主義は、帝国主義の世界支配の破綻点であると同時に、帝国主義の延命の一つの条件であった。だが今や基軸国・米帝自身が、戦後体制の破壊者として登場するところまで行き着いた。自らの延命の条件でもあった中国スターリン主義の存在をもはや容認できなくなり、どんなに破滅的であろうが、力ずくでその体制を打倒・転覆する侵略戦争に突っ込みやり通して、世界を暴力的に制圧する以外には基軸帝国主義として存立できなくなったのだ。

米帝は、昨年６月はイラン核施設爆撃の電撃作戦を強行し、今年１月はベネズエラで空爆の上に大統領を拘束・連行した。そして今回、「協議」渦中で全土爆撃の上にハメネイ師を殺害する「斬首作戦」を強行した。しかも、ベネズエラでもイランでも、中国の支援で構築された防空システムを一気に突き破り、完全に無力であることを突きつけた。軍事作戦をエスカレートさせながら、こうした現実を見せつけて、中国スターリン主義を徹底的に追い詰めているのだ。

この米帝のイラン侵略戦争の現実を前にして、中国スターリン主義・習近平体制は、米中首脳会談の「成功」に体制の存亡をかけ、帝国主義への屈服と協調を深め、全世界的な労働者階級人民の決起の圧殺者としての役割を担っている。３月前半に開催された全人代の政府活動報告でも李強首相は「覇権主義と強権政治に反対」「保護主義や一方的ないじめ行為に反対」という程度の一文さえトランプを刺激するとして読み飛ばした。今やガザ人民を見殺しにし、イスラエルとの関係を続け、イラン侵略戦争を容認し、米帝・トランプとの「良好な関係」を維持することに汲々としている中国スターリン主義こそ、帝国主義を延命させ、帝国主義の中国侵略戦争－世界戦争を自ら引き寄せている「共犯者」そのものだ。

中国侵略戦争－世界戦争を阻止するためには、戦争の元凶である帝国主義を労働者階級の力で全世界的に打倒しなければならない。それは、この闘いを裏切り、押しとどめ圧殺するスターリン主義を打倒することなしには貫徹できない。この立場を貫き、中国侵略戦争阻止の巨万の反戦闘争で帝国主義を打倒する世界史的闘いをやり抜こう。

【３】戦争会談粉砕の大デモを闘い、戦争突進の日帝・高市打倒の大決戦へ

中国侵略戦争－世界戦争の本格化としてのイラン侵略戦争の渦中における高市訪米・日米首脳会談は、歴史を画する戦争会談である。

日米首脳会談は、イラン侵略戦争の明確な支持、推進・激化を日米同盟として宣言するものとなる。そして高市は、「国益」を前面に押し出しながら（「国益」とは一部の帝国主義ブルジョアジーの利益だ！）、ホルムズ海峡への艦船の派遣の要求に応えて、イラン侵略戦争に参戦しようとしている。「調査・研究」名目などの形をとって自衛隊を送り込み、15 年の安保戦争法過程の国会答弁（ホルムズ海峡危機での「存立危機事態」発動を例示）を現実の

ものとして参戦そのものに踏み込むことを狙っているのだ。「敗戦帝国主義」としての戦後的制約を突き破って、数段もギアを上げ、軍事力をもって資源・権益を確保・強奪する公然たる侵略帝国主義へと一気に突き抜けようとしている。

そして首脳会談の柱は何よりも、中国侵略戦争への本格的突入、日米同盟強化を柱にしたその具体的戦争態勢を強力に確認することである。特に、日帝の安保３文書改定、防衛費大増額―米帝が「国際基準」としたＧＤＰ比５％化、沖縄の全面軍事拠点化をはじめとした「第１列島線の強力な拒否防衛体制の構築」を確約するものとなる。米国の次世代型ミサイル防衛構想「ゴールデン・ドーム」に参加し、迎撃ミサイルの共同開発や衛星網の構築で連携することでも合意する。この戦争会談を徹底的に弾劾し、粉砕しなければならない。

高市はこの戦争情勢下で、26 年度政府予算案は旧来の慣例など関係なくなりふり構わず押し通し、３月 13 日に衆院採決を強行した。そして日米会談を転換点にして、さらなる防衛費大増額、９条解体を柱とした改憲攻撃、武器輸出全面解禁、非核三原則見直し、国家情報局設置・スパイ防止法など治安・戦争法案に前のめりで突っ込んでいく。絶望的危機を深める日帝にとってそれ以外に道はないからだ。安定的で盤石な支配を確立することなどできない。どんなに破綻的であろうとも、イラン侵略戦争に深々とかみこみ、中国侵略戦争－世界戦争の放火者として登場していくことに、帝国主義的存立をかける以外にはないのだ。中国侵略戦争阻止、日帝・高市打倒の街頭を揺るがす反戦デモ、改憲・戦争国会を怒りで包囲し粉砕する闘いを巻き起こそう。

４月 29 日には、「昭和 100 年記念式典」を政府主催で開催し、朝鮮・中国－アジア侵略の歴史を全面的に居直り美化し、再び天皇を前面に押し出して中国侵略戦争に突っ込んでいこうとしている。国家主義・国益主義・排外主義と徹底的に対決し、３・11 反原発福島行動に続く４・６天皇福島訪問粉砕闘争も一体で、この許しがたい戦争式典を粉砕しよう。

中国侵略戦争の最大の兵站・輸送拠点と対決する三里塚闘争、「第１列島線」下の安保・沖縄闘争、実際の侵略出撃拠点そのものである横須賀をはじめ全国の反基地闘争、核と戦争を阻む広島・長崎・福島の怒りと闘いは、中国侵略戦争阻止の最大の決戦場である。

１月 29 日～２月５日の日米統合図上演習「キーン・エッジ」では、南西諸島での有事、武力攻撃事態の想定で「反撃能力」＝敵基地攻撃能力の手順を確認する訓練を初めて実施した。中国本土を射程に入れた長射程ミサイルの運用を主な任務の一つとする陸海空自衛隊の統合作戦司令部も初めて参加した。３月 31 日の健軍駐屯地（12 式地対艦ミサイル能力向上型）、富士駐屯地（高速滑空弾）への長射程ミサイルの配備は、戦後史を画する事態であり、中国侵略戦争態勢への本格的大転換だ。大行進九州を先頭にした、３月８日深夜のミサイル発射機のだまし討ち的搬入に対する緊急現地闘争に続き、さらに配備粉砕の闘争に立とう。

動労千葉は「反戦声明」を発して春闘決戦に立ち上がっている。ますます襲いかかる物価高・生活破壊の中で、反戦を貫き、帝国主義を打倒する労働運動の登場が決定的だ。職場・街頭・地域・キャンパスからの怒りの決起を組織し、巨大な闘いを巻き起こそう。

全国での３・８国際婦人デー闘争が切り開いた革命的女性解放闘争の新たな発展を突破口に、青年・学生・女性を先頭にした巨万の戦闘的隊列を拡大し、中国侵略戦争阻止の反戦闘争の大爆発、実力闘争的発展をかけて、４・29「昭和 100 年式典」粉砕闘争、そして５月沖縄闘争、６・14 全国闘争へ攻め上ろう。

本日の闘いを、その歴史的決戦の始まりとして、トランプ・高市を打倒して帝国主義打倒の展望を開く戦闘的大デモとして闘い抜こう。

以上